

前日少し降った雨の名残が、朝日を浴びて白く霧に煙っている。霞む世界に遠く、速度を上げる汽車の汽笛が響く。秋が深まり始めた早朝の幻想的な風景だ。

けれど、そんな静かな時間は、すぐに賑やかな音を運ぶ風に吹き散らかされていく。

朝日の差し込む街一番の大通りに、次々と人々が姿を現しはじめたのだ。

馬車や荷車が、騒々しく車輪を鳴らす。その合間を縫い、こぼれんばかりに野菜を積んだ荷馬車や、色とりどりの花や果物を担いだ行商の者たちが、通り一つ向こうの市場へと消えていく。

夜明けとともに姿を現す光景は、このアラガルディア国の王都エルトナの朝の風物詩の一つだった。

太陽が平屋の屋根を越える頃、大通りの賑わいは頂点となる。朝市から引き上げてくる者、職場への道を急ぐ者、満員の乗り合い馬車や開店前の商品を運ぶ荷車など、ありとあらゆるものでごった返すのだ。

そんな朝の空に、女の甲高い悲鳴が響いた。
思い思いの方向へと向かう人々が、ぎよっと足を止めた。

何事かと振り向くその人波を縫って、数人の男が強引に走り抜けていく。

ひったくりだ、捕まえろ、という誰かの叫びは、突き飛ばされた者の悲鳴や怒声にかき消された。果敢に立ちふさがろうと

した者も、男たちの手に握られた刃物の前にはなす術がない。

刃物におびえ、犯人たちの行く手から逃れようとする人の動きは、肩が触れ合うほどの人混みのなかでは混乱を深める要因となるばかりだ。

一気に伝播した混乱の中を、男たちはいとたやすくすり抜けていく。

男たちの行く手に、籠を抱えた一人の少女が現れた。一抱えもある大きな籠の中には、売り物らしき果物が山のように入っている。

急に目の前が開けたことに驚いて首をめぐらせた少女には、逃げるだけの暇などありはしない。

暴漢たちはなんの躊躇いもなく少女を突き飛ばした。跳ね上げられた籠から、赤や黄色が零れ落ちる。

少女の悲鳴を無視した男たちが、散らばった果物を踏みつける。けれど、そのまま人込みにまぎれようとした瞬間、先頭の男がもんどりうって倒れた。横合いから伸ばされた一本の腕に行く手を阻まれたのだ。

倒れ込む仲間を危うくかわした二人目は、何かに蹴躓いたようにたたたらを踏んだ。

そのまま堪えきれずに倒れこんだ仲間を見て、後続の勢いが止まる。

「な、何だテメエは！」
行く手を阻んだ者に向かって、一人が吠えた。

周囲の人混みが、ざっと遠のく。暴漢たちに立ちほだかった人物が、その中央に取り残される形になった。

そこにいたのは、一人の軍人だった。

深い緑色の軍服の詰襟を喉元まできちんと留め、ほとんど赤に近い明るい茶色の長い髪を三つ編みにし、くるりと頭に巻いた女だった。

自分たちを捕らえる権限を持つ人間に、男たちの表情に動揺が走る。だが、女が武器を携帯していないことを見てとつてか、素早く目配せが交わされた。

周囲には、彼女の仲間らしき人間の姿はない。女一人、どうにかしてしまえば逃げ切れると踏んだのだろう。

「どけ！」

「退かねえと、怪我することになるぞ、お嬢ちゃん」

凄みのある声に、取り囲んだ群衆が息を呑む。じり、と男たちが動くごとに、人垣が広がった。

戦利品を抱えた一人が後退し、残りの二人はそれぞれの手に刃物を掲げた。倒れこんでいた男は、ゆっくりと起き上がって女の背後に回る。

刃物を持った凶暴な男たちが四人、ぐるりと彼女を取り囲む形になった。

女性は、背後で刃物をかぎす男をちらりと振り返って顔をしかめた。だがそれは、武器を持った複数の暴漢に囲まれた者の怯えた表情ではなかった。一見無防備に見える体勢のまま男た

ちを見る視線にも、焦りの色は見えない。

「一応、警告しておく」

それどころか、口を開いた女が発したのは、降伏勧告だった。

「さすがに、四人相手だと上手く手加減出来る自信はない。大人しく捕まってくれるなら、お前たちが怪我をすることもないんだが。どうだ、その気はないか？」

男たちの返答は、突き出されるナイフだった。

群衆から悲鳴が上がる。けれどそれは、すぐに驚嘆のどよめきに取って代わった。

女は、右方から繰り出された腕を、軽く一步下がることでかわした。勢いあまって泳ぐ男の上部に手を添えるようにして引き寄せ、腹部に左の膝を叩き込む。

ぐう、と呻いて刃物を取り落とすのには構わず、軽く腰を落とした姿勢から左手前方に右拳を突き出す。体当たりの勢いそのままに顔面を強打された二人目は、物も言わず後ろに倒れこんだ。

二人が地面に倒れ伏すその間で、一呼吸の間の出来事である。

彼女は、戦利品を抱えたままとっさに反応できないままでいる男に目を向けた。

男は後退りながら周囲へ視線を走らせるが、恐怖心の薄れ始めた群衆の間に逃げる余地を見出せない。

「大人しくするなら、手荒にはしない。ざっざと武器を捨てろ」

息を乱した様子もなく、女が告げる。だが彼女が一步踏み出したところで、目を血走らせた男の顔に、はつきりと笑みが浮かんだ。

「危ない！」

誰かの叫びに、女は身体を捻った。

背後から突き出された刃物が間一髪のところまで空を切る。

肩口の後ろから伸びた腕をつかんで、女は肘を下から跳ね上げた。男の腕が鈍い音を立て、濁った悲鳴が響いた。そのまま強引に投げ飛ばすと、背中から地面に叩きつけられた男は、一つ呻いて動かなくなった。

「だから、無駄な抵抗は止めておけと言ったんだ」

足元に這いつくばった男に、女が呟く。

「うわああああっ！」

最後に残った男が、悲鳴を上げた。

「ど、退け、退きやがれ！」

踵を返した男は半ば奇声に近い声を上げ、闇雲に腕を振り回しながら人垣めがけて突進する。その手に光る刃物に、群衆がどよめく。

女が、右手を一閃させた。

彼女の投げたリングが男の後頭部を直撃した。その衝撃に、男の身体が前方よろけた。わっと崩れた人垣の合間に突っ込む形となった犯人を追って、女が足を踏み出す。

だが彼女が倒れた男の元にたどり着く前に、人込みの中で怒

声と悲鳴が交錯した。それはすぐに、歓声へと変わる。

青い制服を着た警官が、男をうつ伏せに押さえ込んでいる。男の手から離れた荷物を、他の警官が拾い上げた。

ようやく警官隊が到着したのだ。

血を流し呻く者も、ぐったりと意識のない者も、最初に吹っ飛ばされたまま身動きしない男も、次々と駆けつけた警官に捕縛されていく。

隊長らしき男が、女に向かって敬礼した。女が無言のまま、教科書通りの綺麗な動きで返礼する。

大捕り物が終わったことで、人の波が再び流れ始める。

女は左右を見回した後、その流れを掻き分けるようにして通りの端を目指した。建物の壁際までたどり着くと、視線を落として僅かに頬を緩めた。

「リドナ、大丈夫か？」

声をかけた先には、彼女と同じ濃緑色の軍服を着た若い女が、子供を抱きかかえるようにしてしゃがみこんでいた。その首にしがみついているのは、先ほど犯人に突き飛ばされた少女だった。

「はい。申し訳ありません、加勢も出来ずに……」

「いや、いい。その子に怪我は？」

少女が、リドナの胸から顔をあげた。見開かれた双眸は瞬きもせず、軍服を力いっぱい握り締めた指先は、血の気が失せて白くなっている。